

夢枕獏

幻獣変化

角川文庫



げん じゆう へん げ
幻獣変化

ゆめまくら ばく
夢枕 獏



角川文庫 7848

平成二年三月二十五日 初版発行
平成四年五月三十日 再版発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 編集部(〇三)三八一七―八四五―

営業部(〇三)三八一七―八五二―

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所 旭印刷 製本所 大谷製本

装幀者 杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

幻獣変化

夢枕獏



角川文庫 7848

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

序章	一章	二章	三章	四章	五章	六章	七章	八章	九章	十章	終章
	魔性花の香り ましろうか やみ	闇の影	ナ・オム けじゆうこつぎ	化獣黒鬼	ニニガ湖	〈戯〉 こくやぐう	黒夜宮 ひやくろうき	百老鬼 えんしやうじゆ	円生樹 えんしやうじゆ ニルヴァーナ	涅槃の果実	

あとがき

解説

異
孝
之
四〇〇

三九五
三九〇
三五三
三五
二九二
二五四
二三三
一七七
一五
九
四
二
九



ナルマダ川

雪冠樹

NWT.

本文イラスト／天野喜孝
ナ・オム地図／渡辺伸綱

蜜〔の甘味〕を食らうすべての驚たちがその上に止まり繁殖する木、その頂上にこそ甘き菩提樹の実〔真正の知識・不死〕はあれと人はいう。父（太初の子）を知らざる者は、これに到達することからん。

——「リグ・ヴェーダ讃歌」より
（辻直四郎訳）

主な登場人物

- シッタータ……………^{しやもん}沙門。^{ぶつだ}後の仏陀。
- アーラーラ……………仙人。
- ゼン……………^{バラモン}謎の司祭僧。
- シン……………^{えつきんぎょう}易筋行の達人。
- ジャジャ……………ナ・オムに行きたがる男。
- ナーサツダ……………弓の名人。
- ナーザ……………赤毛の青年。父を捜している。
- アーゼス……………ナ・オムの^{ムールン}月露玉をねらう男。
- セガーハ……………月露玉の商人。
- スジャータ……………女奴隷。
- リチア……………女奴隷。
- ウル……………黒人戦士。コンダーニャの私兵。
- ダワ……………黒人戦士。コンダーニャの私兵。
- ダージ……………コンダーニャの私兵。
- 百老鬼……………ナ・オムの^{おき}長。
- 赤鬼……………ナ・オム。^{くも}蜘蛛の身体を持つ。
- 青鬼……………ナ・オム。^{とかげ}蜥蜴の身体を持つ。
- 黒鬼……………ナ・オム。^{しし}獅子の身体を持つ。
- 白鬼……………ナ・オム。
- ヨニ……………百老鬼の娘。アーラーラの妻。

序章

深い闇の中を、風が渡ってゆく。

雨期が終ったばかりの、まだたっぷりと湿気を含んだ風だ。

闇の奥に呼吸する、おびただしい数の獣や植物——人間を含む、それら雑多な生き物の臭気が、湿気の中に濃く染み込んでいる。

動く大気は、豊饒な生命の波動だ。

星は見えない。

月を抱えた雲の腹が、青黒く光る獣の群のように、一団となって天を移動してゆく。

——ヴィンドゥーヤ山塊の東山稜。

北の斜面。

闇の底に広がるアヴァンティの平原から吹きよせる風が、山の中腹の岩棚に立つふたりの男の衣を、絶え間なくなぶっている。

ひとりは老人である。

小柄で痩せてはいるが、ひ弱さはない。禿あがった頭部の両脇に、わずかに白髪がから

んでいる。

もうひとりとは若い沙門^{しゃもん}である。

美しく整った顔たちは、まだ、少年か少女のように見える。白い肌^{はだ}の肌理^{きめ}の細かさは、そこらの女の比ではない。極上の乳^{ミルク}よりも滑^{なめ}らかそうである。きれいに剃^そりあげたばかりの頭部が、かえってエロティックですらあった。

「動いておる——」

じっと雲を眺めている老人が、低い声で言った。

若い沙門にむかって言ったようでもあるし、独り言のようでもあった。

若い沙門は、答えず黙っている。

「動くものは、絶えず在様^{かたち}を変えてゆく」

老人は、視線で雲を追ひ、闇^{やみ}の奥にゆっくりと瞳^{ひとみ}をめぐらせた。

「このわしも、あのような変転のひとつなのではあろうが、おぬしを見ておると、その変転からも、わしだけが取り残されてゆくような気がする」

沙門は、黙って老人の言葉を聴いている。

風がわずかに強さを増した。

「おぬし、どうしてもゆくのか」

声に出さずに、沙門がうなづく。

「惜しいのう。ここにとどまるのなら、やがては、我が門弟共ども、おぬしに師事しても

「かまわぬものを——」

「わずかに三月だ。わずかに三月で、おぬしはわしと同じ場所までたどりついてしまった。なまじ常人よりはものが観えるでな、わしは己れの限界は知っておる。ここより先は、わしは知らぬ。おぬしは、もっと先までゆくことができるだろう」

老人は、はじめで、傍の若い沙門に目をむけた。視線には、深い愛情と、そして、微かな羨望の色とがあった。

「わしは、おぬしに嫉妬しておるのかもしれぬ——」

老人の瞳が、再び雲に移った時、背後に人の気配がゆれた。

「アーラーラ様、灯りの用意が整いました」

アーラーラと呼ばれた老人が、ふりかえった。

「おお、ブックサか」

アーラーラ・カーラーマ——ヴィンドウーヤ山に、門弟三百人と共に住む仙人である。ブックサは、その門弟中でも、特にアーラーラの信望が厚かった。

「ゆこうか」

アーラーラが踵をかえし、若い沙門をうながした。

「おぬしに見せておくものがある」

岩棚から、さらに上に登る小径の登り口に、三本の松明が用意されていた。

三人は、それぞれ松明を握り、草の繁る小径を登り始めた。全員が素足である。径の山側に生える石南花シヤクナゲの枝には、まだ白い花が残っていた。

ブックサを先頭に、アーラーラ、若い沙門しゃもんの順である。

「ナ・オム、というのを知っておるか」

アーラーラが、背後の若い沙門に声をかけた。

「いいえ」

はじめて、沙門が言葉を口に乗せた。

響きの良い、顔よりはずっと大人びた声であつた。

「このヴィンドゥーヤの山脈のむこう、南へ四十三由旬ヨージヤナほど行つた所に、阿説迦国アツサカがある。ナ・オムとはそのアッサカの言葉でな——間違つて生まれたもの——存在してはいけな
いもの——という意味だ」

「——」

「もう二十年も昔になるが、わしは、一度だけ、そのナ・オムを見たことがある。ふたつ、いや、ふたりと言ふべきであらうな。ひとりひとりは女だった。そしてもうひとりひとりは——」

老人は、言葉をとぎらせた。

黄色い炎がゆらめいた。

「もうひとつのナ・オムは——これからおぬしが見ることになるものがそれだ」

苦い想おもいを断ち切るように言つた。

その言葉を最後に、三人は沈黙したまま、小径こみちを登って行った。先頭を歩いていったブックサが立ち止まった。

山側の崖がけに、洞窟どうくつが口を開けていた。

自然のままの洞窟に、人間が手を加えた跡があった。

「ここが、我が教団の秘窟だ」

老人が先頭になり、洞窟の中に入った。

「アーラー様——」

入口の前で、ブックサが言った。

声に、微かに震えがある。

「どうした」

「我が導師グレルよ、わたしはここでお待ちいたします」

炎に照らされた顔が、わずかに青ざめていた。

「よかろう」

老人がうなずくと、ブックサの顔に、安堵あんどの色が浮かんた。

「一須臾イールタ（ほんと）ほどもどる」

洞窟の中は乾いていた。

横穴がいくつかあり、そのいずれにも、人の手の加えられた跡がある。

「誰か、ここに住んでいたようだな」

若い沙門しゃもんが、ひどく大人びた口調でつぶやいた。老人との年齢差を、ほとんど意識してないようである。

「さよう。わしが、二十年前まで住んでいた所だ。我がカーラーマの血筋の、代々の居住窟よ」

言い終えて、アーラーは左の横穴へ入った。

「道が下っておる。転ばぬようにな」

老人の素足が地に触れる音と、松明たいまつの燃える音だけが闇やみに響く。

下るにつれて、空気が次第に冷え込んでいく。吐く息が白い。

十分近く下った所で、床が石の平面にかわった。

「これは!？」

若い沙門が立ち止まった。

左右の岸壁一面に、びっしりと聖典ヴェーダの神々が刻まれていた。

舞う破壊神シヴァ、猪いのししに化けたヴィシュヌ神、太陽神スーリア、曙あけぼのの女神ウシヤス、火

神アグニ——それ等の神々が、みごとに石の浮彫レリーフとなって、華麗な神話の世界を演じている。雷神インドラは、マルト神群を引き連れ、蛇魔ヴリトラを、足下に踏まえている。

「すばらしいものだ」

「カーラーマの家系は、代々阿槃提アフアンティ国の司祭僧バラモンでな、これはその名残りよ。わしが、カー

ラーマの最後のひとりだ。子供がおらんでな、いや、おったが、と言うべきか。カーラーマの血も、わし限りで絶えることになるう」

石の神々は、炎に妖しくゆらめき、不気味な密儀の乱舞をしているようであった。天井が次第に低くなってきた。

奥の、狭まった通路を抜けると、そこは、長方形の石室となっていた。

「着いたぞ」

石室の中央に、人ひとりが横たわるには充分な大きさの、木箱がひとつ置かれていた。柩である。他には何もなかった。

アーラーが柩に歩みより、その傍に、若い沙門が立った。

柩の紫檀材の表面に、うっすらと埃が積もっている。その上に、赤く炎が踊った。

「この中に、ナ・オムが入っておる」

アーラーの顔の皺が、さらに溝の深さを増したようだった。

「開けてみるかね？」

若い沙門が、柩に手をかけた。

「いや、やはりわしが開けるのが、この中に入っているものへの礼儀であろうな」

アーラーが、若い沙門を制し、前へ出た。

老人は、松明を左手に持ちかえ、柩の上にかがみ込んだ。蓋に手をかけ、それを横にずらせた。